

P. クリステンセン著

イーラーンシャフルの衰退  
——紀元前500年から紀元1500年までの  
中東の歴史における灌漑と環境——

清水 宏 祐

ここに紹介するクリステンセンの研究は、メソポタミアからスィースターンにおよぶ広大な世界を一つの歴史的なまとまりをもった地域として捉え、その興亡を考察しようとするものである。著者は、この広がりやを「イーラーンシャフル」と呼ぶ。イーラーンシャフルは、ササン朝の支配領域に対応するものとして使われることがある。著者も明言はしていないが、そのような立場で、この言葉を使っているようである。ここでは、現在のイランとの混同を避けるため「歴史的イラン世界」と呼ぶことにしよう。彼は、この歴史的なイラン世界における都市や灌漑施設の盛衰に注目し、その原因を考察する。本書のタイトルにあるとおり、約2000年という長大なタイムスパンの中で、都市やそれを支える耕地、灌漑施設がいかに変化したか、その最大の要因は何かを明らかにしようとする壮大な試みである。本書の大意を要約すれば、イラン世界の都市や灌漑施設の多くがササン朝時代に完成の域に達し、最盛期を迎えたこと、その後、早いところでは6～7世紀からは衰退がはじまり、10世紀ごろからは、さらに衰退の傾向がはっきりするということである。その原因についても筆者は考察を行い、環境問題に主要な原因があったと考えている。

本書の構成は以下のとおりである。

序論：世界史、中東、環境問題からの展望

第1部（3章よりなる） 出発点：主題と史料について

第2部（6章よりなる） イーラーンシャフル：メソポタミアとフーズイスターン

第3部（8章よりなる） イラン高原の諸オアシス

第4部（3章よりなる） スィースターン

結論

第1部では、ササン朝の主要史料の一つである Khudā-nāma（散逸して現存しない）をとりあげ、タバリーなどのアラビア語史料の中に、いかにその情報が取り込まれているかを概観する。このようにして伝えられたタバリーやハムザ・イスファハーニーの記述から、ササン朝の歴代の君主によって建設された都市が一覧として提示されているのは注目される。ただ、ササン朝時代に建設されたとする都市の中には、支配者の名を旧来の都市に付けただけのものもあるとしながらも、個々の都市について、具体的な考察がなされていないのは残念なところである。

次に、イスラム史料や、上記のようにイスラム史料に埋め込まれているササン朝時代についての情報を使って、時代ごとに各地方の租税の課税評価額や割り当て額を算出して、それぞれの地域の間での穀物生産力の増減の比較を行っている。ちなみに、各時代ごとの比較に使われている史料を示すと、以下のようになっている。

紀元前500年：ヘロドトス

6世紀ササン朝時代：イブン・ホルダーズベ

アッバース朝時代（788、819/920、840ころ、840-873、918/919）：イブン・アルムタッリフ、クダーマ、ヤークービー、イブン・ホルダーズベ、アリー・ブンイーサー

14世紀：ハムド・アッラー・ムスタウフィー

これらの史料の記述から、圧倒的に他の地域より高い穀物生産力を示したメソポタミアが、9世紀はじめにはジバルより下位に転落している様子を描き出している。このような現象がどのようにして起こったかを、次に各地域の状況を個々に述べることによって解明しようとする。これが、第2部以降に相当する。

第2部では、まず、はじめにメソポタミアを取り上げ、ポリビウスらの記述から運河の建設について概観する。次に Khudā-nāma の情報によってササン朝時代の都市と運河の建設について述べ、ナフラワーン運河による灌漑網の完成に象徴されるように、この時代にメソポタミアの生産力はピークを迎えたものの、その直後、7世紀にはすでに衰退がはじまったとする。そのきっかけは8世紀なかばまで断続的に発生した疫病にあった。疫病は、その後9世紀にも再び流行がはじまり、チグリスの洪水なども加わって、生産力の低下が起こったとする。

続いて著者は、イラン高原の各地方について論じている。それらの内容を項目的に紹介すると、以下のようである。

### ○ジバル

都市によって盛衰の度合は異なっている。水資源が豊かでないコム、カズヴィーンが生き残る一方でレイは、最も顕著な衰退の例となっている。モンゴルの侵入以前に、すでに衰退が始まるが、これは主要なキャラバンルートに沿っている都市としては異例といえる。ヤズドやカーシャーンは、大砂漠ぞいのルートにあつて存続した都市である。レイと同様にカナートによる給水システムに依存していたカズヴィーンは衰退していない。1200年頃にはイルハンによるスルタニエの造営によって、人口が同所に集中し、多数の井戸とカナートが作られ、15世紀のティームール朝時代まで繁栄した。しかし、16世紀には支配者が去って、打ち捨てられた状態になった。

一方、11世紀には記録に見える、ヤズドとシーラーズの間、カナートに依拠した小都市アバルクーフは、遊牧民の夏営地と冬営地とを結ぶルート沿いにあつて、シーラーズ～イスファハーン間のキャラバンも立ち寄って存続した。

### ○ファールス

ササン朝期に、大規模な植民によって、マルヴダシュトに見られるように農耕の繁栄と住民の増加が見られた。一方、プワイフ朝からアッバース朝の時代に、シーラーズが発展し、単一の都市へ人口が集中した。例外は海上貿易の拠点のシーラーフである。12世紀には戦乱によって、ファールス南部の衰退が始まり、ササン朝起源の都市が放棄され、農耕も衰退した。秩序回復後も農耕は発展せず、遊牧が盛んとなった。アフシャル、ガシユガーイーなどの遊牧集団が登場し、遊牧的傾向は18世紀には更に強まった。

### ○クーヒスターン

10世紀以降、カナート灌漑の小都市、カーイン、トゥーン、プーズジャー（現在のトルパテ・ジャーム）、タバスなどが地理書に登場する。地震でたびたびカナートが破壊され（たとえば1336年、1493年、16、17世紀）、遊牧化が進んだ地域である。イスマール派の攻撃や、フラグの侵攻の矢面にも立たされたが、プーズジャー、サーヴェのように、これらの障害にもかかわらず、現在まで生き残っているところもある。

### ○キルマーン

北部では、3世紀にダシュテ・ルート沿いにカナートが建設され、「アルダシールの都市」 Veh-Ardashir が建設された。他のササンの防衛拠点とともに、イスラム期以降も存続した。南部が衰退した後、これが12世紀にはキ

ルマーン地方の中心となった。ティームール、アク・コユンル、ウズベク、カージャール朝らの侵入にも耐えて存続した。南部では、ルーデ・グーシユク渓谷、ハリール・ルード沿いのパルティア・ササン時代に作られた都市が、10世紀ころから衰退に向かった。

○ホラーサーン

モンゴルの進入による破壊が誇大に言われている地域である。たとえば、13世紀にイブン・バトゥータが訪れたサラフスは、ラシードやジュワイニーでは破壊されたとされているが、彼は特に異常を記述していない。ニーシャープールにしても、衰退の大きな原因は地震であった。もちろんニサー（ナサー）のように大虐殺が行われたところもある。町によって、かなり状況が異なっている。サファヴィー朝とウズベクとの争奪戦によって被害を受けた地方もある。18世紀以降は、トゥルクマーンの侵入によって、多くの都市が衰退した。

○アゼルバイジャン

ササン朝時代の状況は不明である。アラブの侵入によって、ビザンツやハザルに対する拠点が置かれた。10世紀段階では、まだ小規模な都市が並立していた。13世紀ごろまでに、これらが衰退するとともに、タブリーズの成長が顕著であった。11世紀には大きな地震に遭遇するが、その後も存続した。モンゴル支配時代以降、この地に遊牧集団が流入し、カラ・コユンル、アク・コユンルらの集団もアナトリアからこの地へと移動した。

○スイースターン

ヘルマンド河のかつての本流であったルーデ・ピーヤーバーンでは、紀元前3000年から農耕が行われており、メソポタミアと並んでイラーンシャフルの穀物生産の重要な拠点であった。その時代の都市遺跡シャフレ・スーフテは、80ヘクタールの広さを持ち、その後背地50,000ヘクタールが灌漑されていた。ササン朝時代から10世紀頃まで繁栄するが、その直後から13世紀にかけて衰退した。一時、復興するが、ナフル・アル・タアーム水系（灌漑組織）の機能が停止する14世紀末より再度衰退に向かった。さらに19世紀前半には、一層都市の規模が縮小した。その最大の原因は、ヘルマンド河の堰の破壊にある。イブン・ハウカルが「スイースターンの土壌は塩で覆われている」という記述を残していること、堆積する砂との戦いにスイースターンの住民が忙殺されているとの記述もあり、10世紀ごろには深刻な環境問題に直面していたことがわかる。自然の植生の破壊とナフル・アル・タアーム水系

の水資源の過剰利用によって不安定な農業が行われていたが、外部からの環境変化にも耐えられなくなった一因であろう。

これら、各地域の盛衰を比較して、クリステンセンは、以下のように結論づける。

「イーラーンシャフル」で最も農業生産力が高かったのは、メソポタミアとスィースターンである。これらの地域ではどちらも、パルチア、ササン期に灌漑組織が整備され、都市が拡大された。ササン朝末期に、この拡大が停止するとともに、メソポタミアでは人口の減少、経済の衰退が起こった。メソポタミアでは、二度に及ぶ疫病の流行が、その契機となっていた。その後を継いだ諸王朝は、灌漑機構のダメージを修復しようとするが、長期的に見ればいずれも失敗し、16世紀には実質的にはすでに荒地となっていた。

一方、スィースターンでは、メソポタミアに見られるような明瞭な転換点は認められないが、10世紀には、明らかに衰退に向かっていた。その原因は、「脆弱な環境」にあるものと考えられる。すなわち第一には灌漑用水の変化であり、第二には風による砂の堆積、そして第三の原因としては塩害があったと思われる。

イラン高原では事情は異なり、全体に都市は、さほどの急激な衰退のパターンを示してはいない。マルヴのように都市と、それを支える耕地に顕著な衰退の動きが見られる所はあるものの、メソポタミア、スィースターン程急激なものではなかった。水資源が限られていること、カナートによる灌漑や天水農業のため、集約的耕作による弊害や、灌漑による悪影響は、さほど深刻ではなかったのである。しかし、最大の生産力をもつメソポタミアの衰退後は、「ペルシア帝国」は力を失い、本来「比重の軽い」イラン高原の生産力では、それを補うことは不可能であった。

イラン高原のカナートによる灌漑機構は、特に重要な変化はなく、細く長く生き延びた。農業生産の生産性が上がらなかったという点では水資源の不足が決定的な要因であった。これはヨーロッパ的な見方からすれば停滞ということになるのだが、それは全く無為無策であったということではない。

最後の箇所では、明言は避けているものの、クリステンセンは、生産性よりも農業の継続性を選択したイラン高原型ともいべき農業の形態に評価を与えているように思われる。

このような結論を受けて、今一度全体を総括すると、筆者の意図は次のようなところにあったと思われる。

歴史的イラン世界では、ササン朝時代に主要な都市が建設され、河川灌漑、カナートによる灌漑システムも整備された。都市および周辺農村地域の繁栄

は、ササン朝から初期イスラム時代—10世紀ごろまで続くが、その後衰退に向かった。その原因は、従来言われていることを含めて、次のような点にあった。

1. モンゴル、ティームールによる、都市、灌漑施設の破壊
2. 度重なる地震
3. 遊牧集団の流入による社会の「ベドウィン化」
4. 疫病の流行
5. 環境問題

クリステンセンは、最後のものを最も大きな原因と考え、天水農業地帯においては、衰退の過程の進行は、灌漑農業地帯に比べると顕著ではないとくりかえし指摘する。

戦乱や、外敵の侵入、地震による灌漑システム、都市の破壊、トゥルクマン、カシュカーイーなどによる「遊牧化の傾向」、これらは確かに影響を与えたが、むしろ問題なのは、そのような外乱に耐えられなくなっていた「脆弱な環境」である。「遊牧化は、衰退の原因と言うよりは、むしろ結果である」と彼は力説する。

つまり、耕地が荒廃して農耕に耐えなくなったために牧地になり、遊牧民によって使われるようになったと考えるわけである。また、遊牧民の流入については、次のような見通しも提示している。

耕地の荒廃による租税収入の低下→正規軍の維持が困難に→遊牧集団への依存度の増大。「安上がりな軍事集団」としての遊牧民の導入が、耕地の荒廃の結果であると考えられるわけである。

以上、簡単に本書の内容と論点を紹介した。ここで、評者のコメントを述べておこう。

まず本書の前提をなしている、イーラーンシャフルの歴史的一体性の問題がある。ササン朝の領域が、ほぼこの広がりには該当し、その支配の基礎となった租税の徴収が、この世界からなされたということを認めるとしても（それ自身大きな問題ではあるが）、それが歴史的ユニットとして、後の時代にも変わらずに機能したかどうかというのは、別の問題となる。王朝によって、またその支配の形態によって、地方の持つ意味は変わってくるわけで、ある地方を取り上げ、その租税徴収額を他の時代と比較した場合、同等の比較が行えるかどうかは、再検討の余地がありそうである。

本書の論点で注目すべきは、各地方、その都市とそれを支える耕地の盛衰を、環境問題、さらに集約していえば、塩害による耕地のダメージによって説明しようとするところにある。筆者が再三力説する、天水農業やカナートによる灌漑を基礎としたイラン高原型の農業地帯では、灌漑農業地帯ほど顕

著な衰退が見られないという点は、注目に値する。これについては、さらに具体的な事例を交えて、塩害に関する一層明確な説明が欲しいように思われた。

地域の特質の部分についていえば、大河流域とも、オアシス農耕地帯とも異なる自然環境のもとにあるマーザンダラーン（タバリスターン、ギーラーン）についての論述がない点は残念である。この地方の特質をあわせて考えることによって、本書の主張はさらに説得性を増すことであろう。

本書の細部での史料考証の問題点については、今後の研究による批判を待ちたいと考える。本書の価値は、そのような問題を越えて、大きな歴史の見通しを示したところにある。さまざまな立場から読まれるべき書であることは間違いないところであろう。

Peter Christensen, *The Decline of Iranshahr : Irrigation and Environments in the History of the Middle East, 500 B.C. to A.D. 1500*.  
Museum Tusulanum Press, University of Copenhagen, 1993, IX  
+351p.